



道の駅  
芦北でこぼん

道の駅 原鶴  
ファームステーション  
バサロ

業種：流通／農業（農作物の直売）

左：「道の駅芦北でこぼん」店長の宮本浩司さん。  
右：「道の駅原鶴ファームステーションバサロ」  
取締役部長・駅長の河津純治さん。

## 栽培履歴をスキャンしてOCR処理、 農薬データベースと自動で照合

「fiシリーズ」と「DynaEye」を組み込んだ「栽培日誌管理システム」で  
農薬チェックの正確性と効率が向上

農作物を直売する道の駅では「食の安心・安全」を確保するという重責を果たすため、栽培履歴の確認、特に農薬のチェックに惜しみなく力を注いでいます。この重要な仕事を力強くサポートするのが、株式会社サニックス・ソフトウェア・デザインが開発した「栽培日誌管理システム」です。「fiシリーズ」と「DynaEye」が組み込まれた同システムにより、専門性が高く一筋縄ではいかない農薬チェックもスムーズになります。システムの特長と導入事例を紹介します。

### 正確で詳細な判定が可能な 農薬チェックシステム



道の駅など農作物を直売する店舗では、「食の安心・安全」を確保するための栽培履歴確認が不可欠です。特に重要視されるのは残留農薬などの事故を未然に防ぐための農薬チェックです。

株式会社サニックス・ソフトウェア・デザイン（SSD／福岡県福岡市）の「栽培日誌管理システム」は、農薬の知識を持たない店舗スタッフでも正確なチェックができるように開発された、農作物直売所向けのソリューションです。

同システムでは、農作物の生産者が農薬や肥料などの栽培履歴を管理シートに記入し、直売所に提出します。それをPFUのスキャナー「fi-8170/fi-8150」でスキャンすると、システムに組み込まれた業務用AI-OCRソフトウェア「DynaEye」が自動でOCR処理を行います。次に「農薬チェック」ボタンを押すと、OCR処理された管理シートの内容をシステムが農薬のデータベースと照合し、数秒で出荷の可否を判定して表示します。

農林水産省の農薬データを基に、SSDがJA営農指導部の協力を得て構築したデータベースは信頼性が高く、不合格である場合の理由も表示されます。また、管理シートはOCR専用紙への印刷ではなく普通紙に出力するだけなので、ランニングコストを低く抑えることもできます。

現在「栽培日誌管理システム」は、同システムの開発発注者である「道の駅 芦北でこぼん」（熊本県葦北郡芦北町）を皮切りに、九州を中心に導入店舗を増やしています。以降では、同種の別システムを「栽培日誌管理システム」にリプレースした道の駅の事例を紹介します。

「栽培日誌管理システム」は「fi-8170/fi-8150」を公式スキャナーに採用しています。



管理シートに手書きされた栽培履歴。これをスキャンし、手書き文字をOCR処理します。



データベースとの照合後、不合格の場合はその理由（下方の文字列）が示されます。



## 「栽培日誌管理システム」+「fiシリーズ」導入事例



### 誰でも正確な農薬チェックができる

道の駅 芦北でこぼん (熊本県葦北郡芦北町)

「栽培日誌管理システム」の開発発注者でもある「道の駅 芦北でこぼん」の店長、宮本浩司さん(左写真)に運用方法と効率化の実際についてお話をいただきました。

当店はJAが経営しており、私自身もJA職員です。システム導入の理由は、JAが農業でミスをするのは許されないから。ただ、同じJAでもここは店舗ですから農業の専門家はいません。そこで必要なのが、誰もが扱えて確実にチェックできるシステムです。

生産者の方々には、記入した管理シートを出荷1週間前に持ってきて、自らスキャンしてくださいとお願いしています。手書きされた文字をOCR処理にかけて、認識エラーがある場合は修正し、農薬チェックのボタンを押せばすぐに詳細な結果が出てきます。

ここで不合格が出たら生産者に電話して記入ミスがないか確認し、

書いた通りであれば「残念ですが出荷できません」ということとなります。もし他店に出て何かあったら大変ですから、ここで止めなければなりません。不合格は年間20件程度です。

以前は同種の別システムを入れていましたが、「栽培日誌管理システム」にしてから判定結果がわかりやすくなった上に、管理シートの印刷コストが大幅に減少したので非常に助かっています。

このシステムがあると、職員の教育という意味での人件費も大きく削減されます。使い方さえ覚えればパートタイマーの方でも扱えますし、当店として一番望ましいシステムになったと思います。



広く明るい店内。地元客がスーパー代わりにも利用できる品揃えです。



事務所の一角に置かれた「fi-8170」で生産者自らスキャンします。



職員が読み取り結果を原本と見比べ、必要があれば画面上で修正します。



農薬は扱いが複雑です。ベテラン生産者でも不合格になることがあります。



### コストが4分の1になり時短も実現

道の駅 原鶴 ファームステーション バサロ (福岡県朝倉市)

2022年に「栽培日誌管理システム」を導入した「道の駅 原鶴 ファームステーション バサロ」の取締役部長・駅長、河津純治さん(左写真)にお話をうかがいます。

「栽培日誌管理システム」は「安心・安全」実現のためのツールです。我々従業員の力だけでは農業の万全なチェックが不可能ですから、システムの力を借りて安心・安全を担保するのが目的です。

生産者の方々には出荷希望日の1週間前までに管理シートをスキャンしていただけます。OCRには「思ったよりも正確に読むものだな」という感想を抱きました。合格したらシステムが自動で生産者の方にメールを送り、出荷が可能な旨をお知らせします。もちろん、不合格が出たら確認し、厳密に対応します。

以前のシステムは管理シートの印刷などランニングコストが大き

いことが問題でしたが、「栽培日誌管理システム」にしてからはコストが約4分の1になりました。また照合結果を把握しやすくなったので、不合格に対して詳細を追加確認するときの手間がかなり減少しています。加えて、たとえば農薬を規定よりも薄めている場合、チェック上はセーフだけれど効用の点でどうなのかといったこともわかるので、生産者への注意喚起もできるようになりました。

農薬チェック業務に要する時間だけを抽出するのは困難ですが、体感的には明らかに所要時間が短くなっており、「だいぶ楽になった」という実感があります。



「バサロ」の店内。商品の回転が速く、新しい農作物が次々に陳列されていきます。



事務所に入っただけのところに「fi-8150」が置かれています。スキャンは生産者自身が行います。



シートをセットし、タッチパネル式ディスプレイのボタンに触れるだけでスキャンできます。



システムを活用した正確な農薬チェックにより「食の安心・安全」が確保されます。

